

賀川豊彦の畏友・村島帰之（その六）

第75回～第83回

賀川豊彦の畏友・村島帰之（75）－村島「アメリカ大陸を跨ぐ」（5）

「雲の柱」昭和6年10月号（第10巻第10号）に寄稿の続きです。

アメリカ大陸を跨ぐ（5）

バンクーバーからシカゴまで

村島帰之

（前承）

武士ホテルの歓迎會

正午、武士ホテルで、先生の歓迎會が催される。官民約百五十名出席。日本に三十年もゐられたといふニューエル氏や領事の顔も見えたが、大体は在留邦人の基督信者だ。

阿部牧師や沖山日本人會會議所会頭や領事の歓迎の辞があつて、先生は立って、日本の現状について語られた。農民が困つてゐる事、労働運動がやゝ落ついて来た事、共産党の進出して来た事、しかし、農民と小學教師が比較的健全であるから前途は必ずしも悲しむに足らぬ事など、など、など。そして、先生は私に日本の文芸運動の左傾化について話すやうに促された。

私は立って左翼文芸運動の現況を語り、近く左翼の文士が宗教暴露の一つとして賀川先生の事を小説化する意圖のある事を話した。

歓迎會が終つてから、私たちは日本人會商工會議所へ行く。従前は日本人會と會議所とが別々に存在してゐたのを最近に一緒にしたのだといふ。會議所で日本式の氷水の御馳走になる。金時と宇治とだ。

社の同僚橋口次平氏の令兄に會ふ。そして同氏から、シヤトルの日本人がホテル業及びグロッサリー業において成功してゐること、殊にホテル業は他國人がやつて失敗したものを引受けて立派に盛り立てゝ行つてゐること、加州と違って此處ワシントン州は日本人の柄がよくて排斥などのないこと、等を聞く。（詳しい事は別に書く）

先生はお忙しいので、私だけが市中見物に行く事になる。日本人會商工會議所會頭の沖山さんが、自身の自動車をドライブして案内して下さい。沖山さんはホテル業者の一人だ。

自動車はダウンタウンから湖畔へ出て、並木の美しいドライブウエーを走る。

「日本人會では近くこの湖畔へ桜の木を植付け予定で、目下、その苗木を育てゝゐるのです」と沖山さんがいふ。

湖水には處々に水泳場がしつらへられて、赤や青の水泳着を着た若い男女の姿が見える。一体が日本の海水浴場などとは違った或るあかるさを持ってゐる。湖水の湾曲が、或る一点で尽きる。そこには大きな石燈籠を中心に美しい花園が作られてゐる。これがオリエンタルパークで、横浜市から寄付したものだ。この石燈籠を運ぶためには郵船も無賃輸送を承諾したといふゆはれ附きだ。

花園の花は、名は知らぬが、みな日本のものだ。

燈籠は桃山時代のものを模倣したものだといふ。夜の演説会の都合もあるので、それだけで、ホテルへ帰る。

邦人へ向っての第一声

演説會場へ行く。もう殆ど満員だ。演壇から見ると、二十位から五十位までの邦人の男女でギッシリと詰ってゐる。この人たちが、みな故郷の山河をうしろに、はるばる異郷へ来てゐる人たちだと思ふと、なつなしいといふ感情の外に、いじらしいといふやうな思ひも湧く。

先生は、

「氣象的困難は、他面、また日本民族を鼓舞してゐる。近時日本に頹廢の氣風を認めるが農村の青年は未だ健全である。ロシアの反宗教運動が日本にも傳つて来てゐるが、決して成功するものではない。その理由は、宗教は人間の発明品や創作品ではなく、生命と共に生えたものだからだ。宗教は人間が生命を持つ以上、持たねばならぬ「生きる工夫」である。唯物論を論破するのは理屈ではなくて、愛の実行だ。彼等は人生を単に物と考へ、従つて目的を持たね。だから、機械文明に中毒せる現代人に必要なのは「目的」を与える事だ。発明者は目的を持つ。機械的墮落から現代人を発明的に導く必要がある。一体、天地には不思議の力がある。人間はその命の流れの一部分だ。永遠の生命を神といふ。天地の神が無窮だから、その神の作った人間も死なない。どこで死んでも同じだ。シヤトルで死にたくないなんかといふな。植民地は墓碑が殖える事によってのみ栄えるのだ。迫害、排斥を怖れず、墓を立てよ。」

と、強い調子で叫ばれた。聴衆は何ものかの暗示を得たらしく、元気で降つて行つた。

先生はホテルへも帰らず、その儘、バンクーバーへ。

これは後で聞いた事だが、バンクーバーにおける先生の説教は大なるセンセーションを起し、聴衆は一斉に起立して、感謝を表現したといふ。

私と成瀬さんは、半月振りで陸上で眠ることになったが、矢張りいけない。窓の下を走る電車や自

動車の音が耳についてなかなか眠れない。で、薬品についてみた綿を取り出して耳につめて眠った。

賀川豊彦の畏友・村島帰之(76) — 村島「アメリカ大陸を跨ぐ」(6)

「雲の柱」昭和6年10月号（第10巻第10号）への寄稿の続きです。

アメリカ大陸を跨ぐ（6）

バンクーバーからシカゴまで

村島帰之

（前承）

市中見物

二十三日

朝飯はホテルの隣りのカフェーで只一人で済ます。十時市中案内のため、寺澤さんが来て下さる。成瀬さんは今夕開催することになった映画「一粒の麦」の試寫をするために途中から市中見物を思ひ切られる。

まづ日本人の語學校へ。説明するまでもなく、ここではパブリックスクールで米國民として少年少女たちが受ける教育以外に、彼等の父母の國の國語をも教へて置かうといふので、いはゞ、二重の教育負担だ。今は恰度夏休みで、パブリックスクールは休みだけれど。

第二世は友人との對話がみな英語なので英語は達者だが、日本語は家庭で父母との對話において使ふだけだから上手ではない。先年練習艦隊が当地へ来て此の學校を參觀した際、司令官が一人の子供に、

「何年生ですか」

と訊くと、

「シネンセイです」

と答へた。シネンといふのは四年といふことだ。四年をヨネンと読むことを知らなかったのである。

生徒の作文を見せて貰ふ。文章の中に、やたらに英語が出てくるのも面白い。此頃の日本のインテリの文章を思いひ合せて。去って、向ひ側のグッド・ウィルインダストリーを見る。

グッド・ウィルインダストリー

グッド・ウィルインダストリーは、各家庭の好意になる古物、廃物を貰ひ受けて来て、これを修理再生産し、これによって、失業者に職を与へると共に、その再生産品を廉價で売って得た上り高を一般社會事業に寄附するといふ事業だ。

日本人は品物が廢物に近くなつても、なかなか捨てない。だから、この事業は日本では成功しないと思つた。

女秘書の案内で、買店から各デパートに分類して置かれた廢物の山を巡覽する。およそ家庭にあるものは凡て存在すると思はれた。只それが悉く傷んでゐるといふだけだ。

これも詳しい事は、別に社會事業の雑誌に書くとして、此處には省く。

寺澤さんの話

寺澤さんのお宅へ行く。奥さんが愛相よく迎えて下さる。室内に這入ると山室軍平先生や佐藤定吉博士の寫真が目につく。

寺澤さんは以前から盛に商賣をして居られたが、マーチャントに付きものの「交際」があつて酒や女にも親しまれてゐた。或日、泥酔して帰宅されると、奥さんが苦い顔を見せずに迎えられ、やがて岡崎牧師がやつて来て、寺澤さんに、信仰の話がされた。その事があつて、寺澤さんには何となく宗教といふものが望ましく思はれ出して来た。そうかうする内に、佐藤博士がシヤトルへ見えたといふので行つて、その講演を聞いてゐるうち、つひ決心してイエスの僕となられるに至つたのだといふ。

寺澤さんは、さらに面白い話をして下さつた。

「私は賀川先生よりも三年ほど上級生でしたが、下級生の賀川が、ヤソであるといふことと、それから上級生に対して敬礼しないといふことと、二つの理由から、一度殴つてやらうと思つてゐたのでした。ところが、その機を得ずに済みました。若しその時、賀川先生を殴つてゐたら、私の手は今頃曲つてるでせう」

と。徳島県出身の某名士などは、寺澤さんの銃拳制裁を受けた一人ださうだ。

吉田清太郎先生のお噂などした後、またもや自動車で出かける。

此度は公園や湖畔をドライブして、閘門を見に見く。ここは湖と海との連なるところで、雨水面に二三間の差があるため、これを二箇所も堰き、中間の水門を電気仕掛で開閉しては水準を上下して交通させてゐるのだ。

数千噸の船が、この開門のスイッチ一つで湖から海へ海から湖へと送られて行く。パナマ運河もこれと同じ仕掛だといふ。

最後にワシントン大学の構内を走る。美しい校舎だ。夏季大学に聴講に来てゐるらしい女大學生がサッサと並木道を横切って行く。

學生街のカフェで食事をとる。テーブルの片隅の穴へ五銭白銅一つ入れると、ラヂオが聞える。

ホテルへ帰って一息入れてみると、宮崎氏が見えて、自宅へつれて行かうといふ。氏の自動車でアップタウンへ行く。

話をして見ると、氏の夫人は、私の遠い親戚になるらしい。暫く御邪魔して、社の福本福一君に會ふためにNPホテルへ行く。そこで宮崎、福本両君の外に、廣商野球團に附いて来た正本君も加へて四人の大毎関係者が顔を揃へた事となり、社の幹部へ寄せ書を書く。

そこへ、船で一緒だった野球團の諸君も見えたので、誘はれる儘、廣島懸人會の野球團歓迎会へ、県外者乍ら出席する。太平洋沿岸邦人の中で廣島県人は最も多数を占めてゐるのだ。

帰りに寫真機を買ふ。

この夜、成瀬さんは「一粒の麦」を公演したが大入りであつたといふ。只、閉会間際にフィルムが発火して、一時は混雑を見せたといふ。

賀川豊彦の畏友・村島帰之(77) — 村島「アメリカ大陸を跨ぐ」(7)

「雲の柱」昭和6年10月号(第10巻第10号)に寄稿された続きです。

アメリカ大陸を跨ぐ (7)

バンクーバーからシカゴまで

村島帰之

(前承)

二十四日

朝八時。電話の声に起される。受話機を手にする。「只今帰りました」と、小川先生の声だ。早速起きて賀川先生の部屋へ行く。先生は大元気だ。

「僕は未だ船許りで寝通してゐる訳だよ」

といって、さすがに疲れて居られ様子だ。

バンクーバーでの講演は大成功で、ついでにルンペンの現成などを親察して来られたといふ。只アメリカを一日だけでも國外へ出て、また翌日入國するといふので、移民官の手続きに小半日を要

したといふのは、何といふ煩しきだらうと思った。國境なんて、地圖の上に人間が勝手につけた線にすぎないのではないか。

先生は朝から徳島中學の同窓生に迎えられ記念撮影に行かれる。そして、帰られると、フライデ
ニル博士が見えて、シヤトルを案内しようといはれる。賀川先生と成瀬さんと三人で出かけたが、成瀬さんだけは途中から帰った。

グックウイイルインダストリーを今回も見る。

それから、シヤトルの市中を左に右に走って最後に、今夜、先生の説教のあるバプテスト教会を見る。優に千人以上を容れ得る堂々たる會堂だ。正面にパイプオルガンのあることはいふまでもない。附属の教育會館やSSをも見せて貰ふ。

かうした立派な會堂を、一週に一回か二回使ふだけで、あとは閉めておくとは惜しいものに思ふ。

同郷の先輩と合ふ

ホテルへ帰って、案内所でキーを受取つてゐるこ、私に面會人があるといふ。會ふと、奈良県出身の奥田さんだ。話し合つて見ると奥田さんは私の父も知り、姉も知つて居られる上に、私の小學校当時、一年近く教つた奥田健太郎先生が、氏の令甥であることを知つて、なお一層なつなしさを覚えた事だった。

招ぜらるゝまゝに、アップタウンの氏の家へ伴われる。氏は既に三十年余りも此地に居られて、前のシヤトル日本人會長である。

話つてゐるうちに、近所に住む令妹松村夫人が見える。夫人と話つて見ると、意外ではないか。私と同窓、しかも一年違ひだ。あの人を知つてゐますか、知つてゐますとも、あの時の校長さんば松本忠五郎さんでしたね、さうでしたね、私は岩木先生といふのに習ひましたが、あゝあの方は逝くなりましたよ、等、等と、なつなしい小學校時代の恩師や級友の事が、走馬燈のやうに尻から尻へと繰りひろげられて行く。

私は、一夜、この家で語りあかしても、興はつきなからうと思った。が、私たちは今夜の汽車で立たねばならない。思ひを残して立つ、また奥田さんのカアで送られて。

外人教會の説教

六時から、バプテスト教会で晩餐會が開かれるので出かける。中流以上の外人ばかりおよそ二百人、平和運動のリーダーと知らるゝ博士が司會される。

私の隣には六十余りの婆さんが坐って、善く喋舌る。賀川先生は二十五歳位かななどと訊く。聞きもせぬのに、スキヤキはおいしいといふ。お前はアメリカの食物がすきかと問ふ。半分もいふことが判らない。

デザートコースに這入って、先生は立った。そして約二十分に亘ってテーブルスピーチがあった。とても素晴らしいスピーチで、會衆は呻った。移民問題にまで論及した。先生はいった。

「アメリカには二つのアメリカがある。一つは天國アメリカで、一つは地獄アメリカだ。地獄アメリカは日本に不道德な映画を送って、日本を墮落させる。ミッションにゐる人々は、天國アメリカだ。その人々の手によらねば、世界の浄化は望めない」
會衆は大喝采だった。

宴を閉じると、直ぐ、會堂で説教が始まる。美しい劇場のやうな會堂は定刻前満員だ。勿論、外人ばかり。二千人は這入ってゐやう。

「聖なる聖なる」の讚美歌が始まる。美しい英語の大コーラスだ。私は前方の席にゐたので、うしろから覆ひかぶさるやうに聞えて来る。これほどにスケールの大きい合唱を聞いた事は初めてだ。私はいひ知れぬ感激に、身の引きしまるのを覚えた。

先生は演壇に立った。丈の高い外人牧師に比べて、何と先生の小さい事よ。だが、今に見ろ、先生の説教の進むにつれて、丈の低いのが見えなくなるだらうから。

先生は「日本に基督教が這入ってから、日本人はまじめになった。日本では基督教信者で酒を呑み、煙草をすふ者ば一人もない」といった。果然、拍手だ。アメリカでは神學生が煙を呑み、信者の或者はひそかに酒をさへ呑むからだ。

先生はアメリカの救ひに論及して大喝采の裡に降壇した。この時九時。

會衆は先生に握手するために、列を作って、演壇に詰めかけた。

やっと、握手の列がなくなったのが九時二十分、私たちは急いで教会を出て、ミルウォーキーラインに向ふ。フライデー博士のドライブで。

これから、私たちは大陸を横断して、東部へ行かうといふのだ。
駅につくと、定刻の九時四十分五分前だ。阿部、岡崎、津田、東海林の各牧師の外に、大和の奥田夫妻及び藤本夫妻が見送ってくれられる。

何度も握手をする。愉快だったシャトル滞在に對する感謝をこめて。

岡崎牧師は「同行者がエラすぎるので、あなたを歓待出来ませんでした。モウ一度是非出直してゐらっしゃいな」といはれる。

同郷の奥田さんは、おじさんといった感じがした。藤本さんの御主人は初対面だが「あなたの兄さんと中學が一緒でした」といはれる。

何だか、親戚の一家に送られて旅立つといったやうな気持だ。

賀川豊彦の畏友・村島帰之(78) — 村島「アメリカ大陸を跨ぐ」(8)

「雲の柱」昭和6年10月号(第10巻第10号)に寄稿した続きです。

アメリカ大陸を跨ぐ (8)

バンクーバーからシカゴまで

村島帰之

(前承)

米大陸横断

黄に塗った大きな石油缶を思はせるやうなミルオーキーのプルマンカーに乗込む。ブルマンといふのは寝台車の発明者の名で、各ラインの寝台車の製作を一手にするだけでなく、そのカーによる旅客輸送をも一手でやってみるのだ。だから、汽車會社はたゞ機関車を動かしてゐるだけで、放客ば一切ブルマンが取扱ってゐる訳だ。

切符はサンマーコースでラウンド・チケッ□で、シヤトルーシカゴートロントークリーブランドーニューヨークーシカゴーサソフランシスコ回遊で百八十三弗、平常の約半額ださうだ。

両先生はミンスターといふので割引がある。牧師を優遇するのは、さすがアメリカだ。

汽車は笛一つならさずに動き出した。日本のやうにゴトンといふ音もしない。

寝台にその儘寝て了ふのは早やすぎるので展望車へ行つて見る。勿論、外人ばかりだ。殊にレヂイが多い。絹のストッキングに包んだ太い足を、憶面もなく、われ等の前に積み重ねる。

部屋の隅のホーンからは、ラヂオがダンスレコードを放送する。アメリカのラヂオは、聴取料の要らぬ代り、種々の廣告を放送するさうだが、生憎、英語のハッキリと判らぬ僕たちには、どれが廣告だが判らないから、結局、音楽をタゞ聞きするといふだけだ。

私たち三人は、列車を通じての只三人の東洋人として、ソファに身を埋め乍ら、ラヂオを聞いた
り、話し合ったりする。

賀川先生が「腹がへった」といひ出したので、黒人のコックにサンドウィッチを拵へさせる。
やがて寝台に這入る。賀川先生と私とは下側を向ひあい、小川先生は私の上の方を取る。
かくして、私たちは夢の中に米大陸の数千里を走るのだ。

タゴタの山峡

二十五日

午前七時に眼をさますと、汽車はスポークンに着いてゐる。こゝには日本人が二百人もゐるとこ
ろだ。時間があるので一寸構内に下車して散歩する。

客車と同じ樺色のステーションだ。

汽車が出てから、私たちはまた展望車へ行って見た。そして、その最後部に立って、後へ後へと
あとすざりして行く景色に見入る。

自然が凡て単色で彩られてゐる。水色でなければ黄色だ。

黄はヘイ（まぐさ）であらう。水色はコーン（とうもろこし）であらう。

天地一切が水彩画的だ。

私たちの汽車が行きすぎるのを待って、私たちの来た方へ、線路傳ひに行く一人の男がある。肩
にはリュックサックのやうなものをかついでゐる。

レンペンだ！

何百哩、何千哩かを、線路傳ひに彷徨ふて行くトランプだ。

人家も稀れなこの米大陸を、西へ西へと進んで行く彼等なのだ。

「さようなら、気をつけてお行きよ。汽車にひかれぬやうにな」

と声をかけたい気持になる。小川先生にそれをいふと、

「しかし、この汽車は一日に四列車しか通らないのだから、ひかれる心配はないでせう」と笑は
れる。

さういへば、停車場も、急行車の止らない小駅には、駅員らしい人影もなくて、只オモチャの家の
やうな小屋が立ってゐる許りだ。

レールと平行した道を、自動車の尻にテントらしいものをつけたのが走る。キャンプ生活へ急ぐ
一家連れなのだらう。小川先生が手を振ると、先方も手をふって答へた。

汽車は午後からタゴタの峡谷にさしかゝった。この峡谷美と、ロッキーの山嶽美を観賞するために、ミルオーキー鉄道は、この区間、特に電気機関車が連絡して、煤煙の出ない所謂ホワイトコースをやっているのだ。

展望車の外に、さらにオープンインフォメーションカーが連結される。何の事はない貨車にベンチを取付けたやうなものだが、風がよく通るし、四辺の景色がその儘観賞出来て、興味まさに百パーセントだ。

汽車は山峡に這入った。

危なっかしい断崖の下を、清流の上を、橋のやうに峡と峡とを結びつけた高い鉄橋の上を、汽車はうねり乍ら、またあえぎつゝ進む。

私たちの先を、別の汽車が行くのかと思ふと、それが、わたしたちの汽車の最前部であった。それ程、汽車は長く連なっていた。

最前部から、最後部の私たちのいるオープンカーまで、およそ四五丁はあろう。

汽車は蛇のやうに山峡をうねりつつ進む。屏風のやうに両側は切り立った山と山に風を遮られて、汽車は浴槽の底を行くやうな暑熱だ。

でも、オープンカーにいれば、さすがに汗は出ない。夕方、小半時間、小雨が来たが、直ぐ晴れて夕日が照った。

その頃には汽車は既にタゴタの峡谷を出て、銅山で名高いビューターに近づいてみた。

「見なさい。銅が露出してみますよ」

小川先生が注意するので見ると、黒い岩が至るところに突出てゐる。

時には鍍脈が汽車の線路近くに断崖となつてゐて、私たちの上に、今にも崩れ落ちさうに見えた。

汽車はビューター駅に止ったので、プラットフォームへ降りてエハガキを買ふ。一弗紙幣を出したら、昔の日本の一圓銀貨のやうな大きい五十銭銀貨や二十五銭銀貨でツリをくれた。何だか儲けものをしたやうな気持だ。賀川先生は大きな圓い銅の文鎮を買はれる。

「オー、ビッグ、コイン！」

といって、黒ン坊ボーイが笑ひ乍ら手に取る。

賀川豊彦の畏友・村島帰之(79) — 村島「アメリカ大陸を跨ぐ」(9)

「雲の柱」昭和6年10月号(第10巻第10号)に寄稿した続きです。

アメリカ大陸を跨ぐ（9）

バンクーバーからシカゴまで

村島帰之

（前承）

ロ ッ キ ー

夕方からロッキーにかゝった。

山また山だ。

しかし、ロッキーは、どこが山嶺なのか、見当がつかない。山脈としては、それが当然なのだらうが。

夕陽が照る。遙か東方の山は、それに照り映えて、プリズムのやうな色彩の断層を見せる。その上を直角に虹が立ってゐる。

汽車と、そのプリズムの美しい山と山との間は、何萬町歩とも知れぬ荒漠たる平野だ。

何といふ壮大な景色だらう。島國では見られぬ壯観だ。

汽車はその山の方へ走って行くらしい。が、暑い事は耐らなく暑い。と共に、腹はよく減る。毎食事は定食の殆ど全部を平げる。

汽車の中なので（駅売りなんてものは全く来ない）定食は一弗以上だ。

九時、オープンカーが取り除かれたので帰って来る。

余りの暑さに少し窓をあけておくと、ひどいススだ。モウ風景の観賞の必要がないので、電気機関車を廃して汽罐車に代えたからだ。

夜中、ふと目をさますと、汽車に小駅に止まってゐて、構内に留置になってゐる貨車の上を、七日あまりの月が照ってゐる。

月は何となく人をセンチにさせる。或は東洋人特有の心理なのかも知れないが。

遙かに家郷を思ひ出して、祈りつつ眠る。米大陸は夜半でも、日本は未だ真昼で、愛児は野球ジャツ一つで飛廻ってゐる事だらう。

廿六日

けふは寝坊をした。八時だ。愚圖々々してゐては食事を食べ損なはねばならない。早速起きて、折柄、着いた駅に降りて新聞を買ふ。

サンデーペーパーなので十仙だ。新聞はスポーツが最も多くのスペースをとり、これに次では社

交や流行や新刊紹介が数頁づつをとってゐる。

黒ん坊のボーイが鼻血を出したので、早速小川先生がメンソレータムを綿につめて鼻につめてやる。小罐のメンソレータムは一時に半分ほどなくなって了ふ。それほど彼の鼻の穴は大きいのだ。小川先生はこれによってドクトル・メンソレータムの称号を奉られる。

けふは、もう前日のやうな山峡美などは全く見られない。一面の廣漠たる平原だ。果てしもしらね廣原だ。

水平線か限りなくつづく。

時には、水平線上に、放牧された牛馬の姿を見、時には積重れられた小麦の束を見た。ミレーの絵だ。

たとへバラツクでも何十里に一軒も家を見ない處が多い、只これへいでなければ小参の畑、畑、畑、畑だ。

農夫の姿も全く見えない。耕すとか、間引くとか、灌溉するとかを知らぬ沃野なのだ。只天から降る水が必要なだけだ。

けふは日曜なので、礼拝説教のラヂオ放送があると思つて、展望車へ出かける。果せるかな、ホーリーホーリーの讚美歌に始まって、説教があつた。讚美歌はニューヨークのどこかの聖歌隊だつた。

午後三時、アバーディン着。五分間停車といふので、上衣を脱いだ儘、下車して見る。とても暑い。空気そのものが火のやうだ。人は日影をよつて歩く。

車内のアイスウォーターに補給する氷を山のやうに積んで来てゐる。

日影に立ってゐる駅夫に訊くと、攝氏百十五度だといふ。

車内が暑い筈だ。といふ訳は、さなきだに外気の熱してゐる上へもつて来て、われ等の乗るブルマンカーは内部がすべて鋼鉄で出来てゐるので、熱を持ったが最後、容易にさめない。それに各寝台は一組づつセクションを作つてゐて、各セクションの間には、これまた鋼鉄の区切が立てられてゐるのだから、何のことはない。私たち一同が罐詰に這入つて消毒されてゐるやうなものだ。

ひっきりなしに室外のアイスウォーターを呑みに行く。アイスウォーターは、水道の水のやうに栓一つひねれば出て来るのだ。紙コップが、自動的に上から一つ一つ落ちて来る仕掛だ。

小川先生が隣りのアメリカボーイとすっかり仲よしになつて、ジャンケンを数えたり手品を数えたりする。

汽車が留ると「時間があるか」と訊いて停車時間だけ下車する。

アイスカウト！ と呼び乍ら、筒入のアイスクリームを売りに来る少年のある以外、賣子は一人も来ない。

エハガキ一つ買ふにも、駅の買店まで走らねばならぬ。

けふはもうオープンカーもないので、罐詰りながら眠る。

賀川先生は頻りと瞑想してゐられる。講演の腹案を作って居られるのだ。

「暑熱と戦ふには瞑想に限る」といって。

夜に入ると、少しは涼しくなったといひたいが、依然たる暑熱だ。

展望車でラヂオを聞きながら、九時すぎまで外人の中に、只一人の東洋人として踏み留る。

賀川豊彦の畏友・村島帰之(80)－村島「アメリカ大陸を跨ぐ」(10)

「雲の柱」昭和6年10月号(第10巻第10号)に寄稿文の最終回です。

アメリカ大陸を跨ぐ (10)

バンクーバーからシカゴまで

村島帰之

(前承)

シカゴ

二十七日前

汽車はいよいよシカゴに近づいた。アメリカ第二の大都會、犯罪の都、そうした概念をもって、私は次第々々にシカゴに近づいて行くのだ。

汽車はシカゴの町へ這入った。何といふ薄ぎたない都會だらう。日本なら神戸に這入らうとして、新川の貧民窟附近を通つてゐるといふ感じだ。只平家のスラムが十層近くのアパートに代つてゐるといふだけの差はあつても。

汽車がつくと、YMC Aの島津岬さんが、瀧澤さんと一緒に迎ひに来て下さつてゐる。

新聞記者が寫真班員と来てゐる。記者は賀川先生を掴へて二分とは對話してゐなかつたが、寫真

班員は悠々として、先生をプラットに立たせた儘、徐に三脚をすえ、ピントを合せ、そして、フラッシュ・ランプを焚いた。その間、十分以上もかゝったらう。気の短い日本の名士なら、癩癩を起して行って下ふところだらう。

島津さんの発議で「クリスチャン・センチュリー」を訪問する事になる。駅から直ぐなので歩いて行く。

シカゴの街は、さすがに魔天楼も高い。が、それがことごとく煤烟のためによごれて、真っ黒だ。

「岡山の城は黒いから烏城といふが、シカゴの街は黒いから烏街といはうか」

と私は賀川先生にそういったほどだ。

建物の前部に、雷光型の非常梯子の見える家が多い。

クリスチャン・センチュリーではハッチェソン氏が悦んで先生を迎へた。青年會の話、協同組合の主張、支那の旅行談などが先生の口から突いて出る。

そこを出て取り敢へずYMC Aへ行く。そして着物をそこへ置いて、シカゴの自然博物館へ出かける。先生は熱心に有史前の動物を研究される。私は土人の祭祀などの土俗の参考品を面白く見た。

YMC Aへ帰ってから、私は寝ることにした。その間に先生は、邦人有志のために、一席の講演をせられる。

六時、歓迎晩餐會が催される。私も起きて出る。日本に三四十年も居られたコウズ博士も見える。「有名無実ですよ」などといふ漢語を用はれる。シカゴ大學に居られる加藤博士も見えた。

シカゴはまた改めて来るとして、私たちは晩餐をすませて直ぐ尻を上げた。トロントに向つてまた汽車に乗るために。

汽車は出た。カナダに這入るので、また移民官の検閲だ。まづアメリカの官吏が来て、次でカナダの官吏が来た。しかし、双方とも簡単で通してくれた。

私たちは夢の中にカナダとアメリカの國境を越えた。

(この号での掲載はここで終わる。このタイトルの続きは、第 10 卷第 10 号に継続されているので、追つてここで収めて置きたい。)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(81)－村島「アメリカ紀行」(1)

「雲の柱」昭和6年12月号（第10巻第12号）に寄稿した作品を取り出して置きます。

アメリカ紀行（1）

カナダからアメリカに入る

トロント――ニューヨーク――クリブランド

村島帰之

ト ロ ン ト

七月二十八日

朝八時。いよいよ汽車はカナダのトロント駅についた。いふまでもなく此處に開かれる基督教青年会萬國大會に出席のためである。先生は日本代表であると同時に、特別講師として講演されるのだ。萬國同盟会長で元日本にゐた事のあるヘルプ氏がモット博士の命で出迎へに来てくれてゐる。

早速、自動車でY・M・C・A萬國大會の会場の方へ走る。

街路樹の美しい町だ。十九世紀のガッチリした赤煉瓦のハウスが並んでゐて、その並木道の中をドライブしてゐると、自分たちが十九世紀の小説中の人物にでもなったやうな心持がする。

街路樹は市が管理してゐて、蟲がついたりすると、電話をかければ市の公園課から人が来て蟲退治をしてくれると云ふ。それほど熱心さがなければ、これだけの美観は得られない訳だ。

萬國大會といふ大きな布の看板の出でゐるトロント大学ウィックリフのホール（大學寄宿舎）に着く。既に各國の代表者は前日から着いてゐて、世界の各人種の博覧会の観がある。

日本からの代表者は、私たちを加へて四十名、賀川先生は「行李を解く前に祈りませう」と言つて、小川、村島と三人で祈る。

賀川先生は早速、モット博士の處へ行かれる。そして、帰つて来ての話に、賀川先生に対する各大學その他からの招待状が積んで山をなす有様だが、既にスケジュールが一杯なので断つてくれたとの事だと。

招聘大學の中には、コロンビア、コロネル、ブラウン、プリンストン、ハートホード、ワシントン

ン、ミネソタの諸大學を始めとして夥しい数に上って、若し之等の招聘に一一応じてみれば、先生は少くとも二年間は滞在してゐなければなぬまいといふ。素晴らしい人気だ。

またカナダでは、折角トロントまで来てみながらアメリカで許り講演して、カナダではわづかバンクーバーとトロントの二ヶ所に過ぎないのはあんまりだと言って苦情をいふ向もあるさうな。

先生の「愛の科學」は英訳されて既に数千部を売ったといわれる。人々は常に先生とガンヂーを対照しゐるやうだ。Y・M・C・Aの機関紙には「われらは東洋から學ぶ」と題して先生などのことを書いてゐた。

新聞記者がインタビューに来る。あんまり突込んで質問して来ないのは物足りない気がした。先生は例によって基督者のインターナショナル組織と協同組合運動の必要を力説される。そして日本の基督者の真摯な事を説いて、大毎が宗教欄を持ってゐることなどを吹聴された。

トロントはシカゴと同じやうに、一時間、時計を進ませて、それだけ働く時間を多くしてゐるので、汽車中一時間進ませた時計を更に一時間進ませる。

食事は別のホールで各國人が入交つてする。食後、休憩してゐると、モット博士が見えた。賀川先生の紹介で握手をする。怖い濱口さんのやうな顔をした人だが、一個の大人格であることは、その長く前へ突出た一文字のにも窺はれる。

長野の善光寺の附近で久しく傳道してゐられるノルマンさんにも會ふ。
「私はノルマンでなく門番です」
と流調な日本語で洒落をいふ好老人だ。

賀川先生の話では、長野で「ノルマンさんといふ西洋人はどこにゐる」と訊くと、小兒たちは「西洋人と違ふ。ノルマンさんだ」と修正するといふ。親しみの深い老人だ。

午後は各種の討議があるが、私は疲れてゐるので、充てがはれた自分の部屋で寝るとにする。六畳位の部屋に、旧式のベッド、鏡台とテーブルがあるだけで、飾り一つない簡素なものだ。これが神學生の部屋なのである。新しい學校の寄宿舎になると、學生の部屋がその富の程度で二室、三室も取つてゐるのがあるといふが、神學生の部屋としては、むしろ、かうした質素なのが好ましいと思つた。ベッドのバネもなかば破損してゐるやうな物だ。だが、私は喜んでそのベッドに横になつた。

午睡後、トロント大學の神學校に在學中の前川清兄の案内で大學を見て廻る。おそろしく体育の

設備の完全してゐるのには驚いた。地下室はプールになってゐて、数十名の大學生が裸体――真の裸体で横行潤歩してゐるは、われ等の目には異様に映った。

「前をかくしてゐると性病患者のやうに思はれるんですよ」と前川兄が説明してくれる。プールの水は飽く迄澄んでゐて、白い膚のアメリカの青年が、碧みがかつたその水を勢ひよく蹴る。同行した布哇の安村さんは、シャワーにかかつた。

もう一方の地下室には劇場があつて、校外及び校内の劇團の試演があると云ふ。外は美しいローンだ。ゴジック式の美しい記念塔では、タワーのチャイムが讚美歌を鳴らす。夕飯は學生の大食堂で喰べる。四、五百人は這入るだらう。向ふ三軒、両隣の外人とも、片言交りで話す。

夜は講演があるといふので、ドームの美しいホールへ行くと、講演は既にすんで、映画「カナダ」の映寫と、黒人の讚美歌合唱を聞いた。終わつて、三人、ローンに寝ころび乍ら宗教談をする。九時だといふのに、白光が射して未だ明るい。

「もう少し北方へ行くとオーロラが見えるんだけど」と先生がいふ。賀川先生は至るところで引張風で、明日の講演の準備も全く出来ない始末だ。

今井よね子さんから「今夜十一時、トロントに着く」といふ電報が入つたので、三人で十時、出迎へに行く。

ダウンタウンも、さすが夜更けだけに静まり返つてゐる。停車場前も、少しの雑沓もなく、駅前の十数軒の何とかいふ百貨店のタワーが反射電燈で白く浮出てゐるのも、トロントらしい沉着を見せてゐた。

駅について聞いて見ると、今井さんの到着は十一時は十一時でも、スタンダードタイムの十一時なので、トロント時間の十二時すぎだ。で、翌日の賀川先生の講演の事も考へねばならぬので、一まづ帰ることにする。

途中、ドラッグストアへ這入つてアイスクリームを食し、本屋で雑誌を見る。映画雑誌にあらざれば探偵雑誌だ。

帰りの自動車の運転手は元氣者で「日本は戦争に強い國として知つてゐる」と話す。小川先生はムキになって、日本が好戦國でないといふことを話すと、急に黙りこくつて了つた。戦争の好きな男なのかも知れない。

十一時半眠りにつく。夜中アスファルトの路をか敲くヒズメの音が頻りに聞える。それに牧場へ急ぐ牛乳馬車だといふ事が、翌朝になって始めて判った。

賀川豊彦の畏友・村島帰之(82)－村島「アメリカ紀行」(2)

「雲の柱」昭和6年12月号(第10巻第12号)への寄稿の続きです。

アメリカ紀行 (2)

カナダからアメリカに入る

トロントーニューヨークークリブランド

村島帰之

(前承)

二十九日

賀川先生が提唱して、朝七時から早天礼拝を始めて居られるのに出席しなかったが、眼を覚ますと既に八時だ。やっとの事で朝飯の間に合ふ。

けふは時間が遅かったので私独りぼっちだ。隣りは布哇とアメリカ。ブロークンで話す。布哇の代表は首から黄や青の花輪のやうな首飾を掛けてゐる。出発の時送られたものを後生大事と掛けてゐるのだ。スコットランド代表は、女のやうなスカートをはいてゐる。

九時からホールの礼拝に出る。祈って歌って説教をするのが礼拝だと思つてゐるわれ等には、最初から朗読一点張りで、合間、合間に、會衆一同が和して **I want to be Christian** をいひ、また黒人の合唱が這入って、それで終る礼拝は何だか勝手に違ふ。

ホールを出ると、そこで絶えて久しい今井さんに會ふ。今井さんは三年半、此方にゐる間にすっかり若返つてゐる。

「アイランド湖から出て幾つかの湖をカヌーでやって来ましたの。だからこんなに黒くなりました」

賀川先生の部屋へ一緒に行くと、先生は今井さんをインディアンにしてさふ。それほど日に焦つてゐるのだ。

午餐は賀川先生、今井さんと私と三人一緒に食後、學生間の流行唄（フランスの鳥の啼き声を寫したもの）を合唱した後、一同その國の名と自分の名をいふ事になった。恐らく世界各國の國民が集ったであらう。日本はわれ等三人だけだった。（外の日本人は別のホールで食事したのだらう。）

賀川先生 I am Kagawa Japan といはれると拍手はわが賀川先生とそしてモット博士の二人になされただけだった。

この食堂は大食堂ほどではないが、二、三百人は容れられるだらう。壁間には「ウォーターロー戦敗後の奈翁」の油絵がかゝってゐる。一人の兵卒が倒れてゐるのを奈翁が眺めてゐる光景だ。奈翁は帝國を失ったが、兵卒は一切を失った――といったやうな説明がついてゐた。

食事のサービスは英國流に白襟のついた黒いワンピースを着た婦人が、汗みどろになって、運んでくれた。

飲物を「コーヒーかミルクか」と訊くので、「ミルク、プリーズ」と返事する。片言でも通じると嬉しいものだ。

出発前、一矢君が「會話なんか稽古しなくたっていい。大和魂で行け」と忠告してくれたことを思ひ出される。

食事もうまいが、ミルクがとてもおいしい。これでは英米人が肥えてゐる筈だと思ふ。

午後は前川さんの案内でトロント大學の博物館を見に行く。いろいろの武器がある中に交って、奴隸の足に括りつけた鉄鎖とオモリのあつたのには一種の感慨無きを得なかつた。誰か、今日の労働者がこの鉄鎖につながれてゐないといひ得やう。

甲冑に似た鉄のプロテクトが沢山に並んでゐる。こんなにまでして、人間同志が何故闘はねばならなかつたか。否、現になほ戦はねばならぬか。いろいろの武器を見せられて、人間の争鬪性を悲しく思った。

聖書に出て来るレプタヤやユダヤの着物や、燈火台や金で作つた偶像なども興を惹いた。

日本のものもあつた。吉原の花魁の浮世絵をゲイシャと説明のついてゐるのも面白い。將軍家の驚籠は、何でも、家茂から某外人が貰つたものだと伝えられるとか。

十八、十九世紀の室内の有様の模型も面白かつた。大体に西洋の人は、家の中を整頓してゐる。不用品などが並べてはない。日本なら整頓してゐるのは客間だけだ。日本人は不用品を蓄えすぎるのではあるまいか。

今井さんの服装に似た黒人の服装があつたので、先生は今井さんに「博物館から出て来たインデ

アン」の尊称を奉る。

小川先生は大車輪で、夜の賀川先生の講演のプリントに忙しい。

午後八時、講演が始まる。二千五百を容れるホールが一杯だ。私は今井さんと二人で一番前列に陣取る。やがて先生はモット博士らに伴はれて、プラツトホームへやって来る。急霞の拍手だ。身の引き締まる喜びだ。讚美歌の合唱の間、私は祈った。どうか先生の講演の上に神の加護のあるやうにと。すると知らず知らずに涙がこぼれ落ちた。

二千余の異邦人の中で、日本人賀川豊彦が今、叫びをあげるのだ。ああ、何といふ感激のシーンだ。

日本から来てゐる代表たちも、けふは同胞が演壇に立つといふので、期せずして輝かしい顔をしてゐる。前方の椅子に腰を下してゐるのは、たゞに今井さんと私だけではなく、傍らを見ると、大連の中川さんや勝保さんの顔も見えた。

賀川先生は、今日は外人の前に出るので、三圓の賀川服を脱いで、六年前の外遊の時、北海道の佐藤さんから贈られた黒い服で居られる。

仁王のやうな六尺豊かなモット博士に並んで腰をおろす先生は、見るからに痩せて小さいが、そんな事は敢て意とするに足りない。今に見ろ、先生の雄叫びが、各國の代表の魂に大きなショックを与へるから。

印度入の合唱、独逸入のメッセージの朗読があつて、先生は立った。

可成り大きい声でスタートを切った「愛」の説明だ。愛は冒険であり、愛は危険な道だ。しかし、この愛の道を外にして、人間の行くべき道はない。といて日本における十字架の実行者の例証（石井十次、本間俊平等）を挙げられ、みんな裸体になれ、そして貧しき者、弱き者を救はふと力強く結ばれた。

賀川豊彦の畏友・村島帰之(83) — 村島「アメリカ紀行」(3)

「雲の柱」昭和6年12月号（第10巻第12号）への寄稿の続きです。

アメリカ紀行（3）

カナダからアメリカに入る

トロント—ニューヨーク—クリブランド

村島帰之

(前承)

三十日

けふは九時まで寝てみたので朝飯はぬき。

一時凌ぎに戸外で売ってゐるアイスクリームを喰べて「アメリカにおけるカガワ」の原稿を書き上げ、東日の岡崎さん宛に送る。

昼飯はカナダ各教会の招待で、百貨店「イートン」へ行く。主客が交り合へといふので、私のテーブルは三人の英人に私一人が外国人だ。横濱は人口がどの位あるか、東京と横浜とはどの位人口の開きがあるか、賀川氏の年は、体重は（これは貫なら知ってゐるがポンドでは判らなかつたので知らぬと答へざるを得なかつた）、大阪毎日新聞の発行紙数は等々を訊かれる。ブロークンで答へたら、大体は判ったやうだった。

要するに単語を並べればいゝんだ。そして先方が判らないやうだったら、二度も三度も繰返すのだ。

「毎日」の意味が判らないので、デーリーと訳したら「アイシー」と来た。

「トロントは美しい町だ」といふと「イエス」といってニコニコする。人情に東西の差はない。大体はカンで行く事だ。

招待會を終った後から???を見に行かうといつてプライス博士に誘はれ、ベーツ先生や賀川、小川、小林、前川の諸氏と一緒に出かける。

トロントの町から約三十五哩離れてゐるところだ。途中、ひろびろとした農場が見えるが、農家に一戸で五十乃至百エーカーを耕してゐるといふのだから、日本の一百姓に比べて二百倍からだ。

小麦の取入れてゐるのが見える。馬が走ると、車輪の廻転につれて鎌が車のやうに廻転して、まるで頭髪の刈られるやうに小麦が刈られて行く。

この附近から労働党所属の婦人の代議士が出てゐると、前川さんが説明された。

ボルトンキャンプはスター紙の斡旋によりロータリークラブその他の団体及び個人からの寄附で数十の木造キャンプハウスを作つてあつて、そのハウスは大小の差はあるが、多きは百人、少きは十人を収容する仕組になつてゐる。釣床になつてゐるのもあつた。各ハウスは多くは丘の上に立てられて、その一つ一つが趣を異にしてゐる。各ハウスにはヂッケンスとかいふやうな名がついてゐる。

食堂や談話室、医務室は別になってみた。私たちは談話室で茶菓の御馳走になった。聞けばここへは六月初から八月末まで、十二日交替で市街の薄倅、虚弱児童を収容するのだが、或は家族が多くて弱い者、母が結核患者で児もまた弱い者などが、方面委員の手から送られて来てゐる。毎回三百人位が送られて来て、期間内に五千人位の児を送り迎へするといふ。

新鮮なる空気に浴し、またプールに飛込んだりしてゐれば、メッキリ健康がよくなって帰るといふ。われ等の巡回中、午睡中のものもあつた。可憐なる寝顔！

私たちは彼等のために祈らざるを得なかつた。帰途はプライス博士令息が六十哩のスピードで運転してくれて、三十五哩を二十分間で宿へ帰ることが出来た。

前日出した洗濯物が帰つて来た。私の腹巻――安東長義さん夫妻が、外國へ行つて腹を冷さぬやうにと心づけて贈られた――が行方不明だ。

「腹巻なんてものは、此方の洗濯屋は見た事がないから、屹度、博物館へ出品したに違ひない」と賀川先生がジョークをいふ。

何にしても惜い事をした。私は旅券と銀行の信用状は腹巻に入れてゐるのだから、腹巻の紛失は金庫の紛失だ。幸ひ予備が一つあるにはあるが。

食後、キャンプ・ファイヤーを見に行く事にする。今井さんと二人で、どうして行かうと相談してゐると、風采の立派な英國紳士が来て、スタヂヤムへなら私が送つて上げやうといつて、自分のカーの方へ連れて行つてくれた。甲子園球場ほどのスタヂヤムだ。

最初は、La Crass といふ笹のやうなラケットで球をすくつたり、投げたりして、ゴールへそれを投げ入れるゲームである。インディアンのゲームださうだ。やがて夜が来る。

いよいよキャンプファイヤーが始まつた。まづ各國のデレゲートの入場式だ。楽隊に合せて各自の國旗を掲げ乍ら肅々と入場する。各國代表の行進は、國境も、カラーも超越しての人的感激を催させる。

實際、われ等は人間同志であるだけなのだ。その他のものは何でもない。私たちは各國の旗が順々に面前に来る度に拍手を送つた。

が、しかし、日章旗、おゝなつかしい日章旗が、東京及び大阪のYMCÅのボーイスによつて捧げられて来た時、われ等の感激はその頂点に達した。涙ぐましい心地！ 身のひきしまる思ひ！

やがて夜となると共に、各國代表中の代表者によつて、スタヂヤムのホーム附近に積んだ薪に火

が点ぜられた。周囲を取巻いた代表の捧げる各国旗がその火の光によって赤く映し出される。これからこの火を囲んで演技が始まるのだ。最初は羽毛のハットを着たアメリカインディアンの原始的な踊りがあって、それから各国代表の演技がつづく。

布哇の代表に蛇皮線に似た楽器を奏でた。

チェコスロバキヤの代表も何か知ら唄った。

ドイツの代表も唄った。

スカートをはいたスコットランドの代表のダンス—わが國の少女がコロチンを唄ひ乍ら綾取りのやうに行進して行く演技—はまるで女のダンスそのまゝだった。

日本の代表は、若し順番が来た場合も予想して、盆踊を稽古して来たといふが、つひに演らなかつた。國際人の前でやる日本的演技は果して何がよいのか、考へて見たが思ひ浮ばない。

十時過ぎたので、途中で、またもや英人に送って貰って帰る。

(つづく)